



MASAHIRO NAKANO

経済学部准教授

1969年生まれ。熊本県出身。2000年神戸商科大学経済学研究科博士後期課程修了。主要な研究テーマは経済変動の分析。とくに設備投資変動と貨幣・金融市場のつながりを中心に研究している。

<http://www1.tcue.ac.jp/home1/mnakano/index.html>

経済学に限らないでしょうが、われわれ教員は、一定時間内にできるだけ多くの事柄を「幅広く」学生に伝えて興味を促したいと考え、他方では学習効果を高めるため、優先的に理解すべき基礎部分から応用部分までのトピックスを「整然と」示したいと考えて、教壇の上で悩みます。そこで教員は自分が考えるいわば「立体的な」バランスにしたがって（講義に合う）テキストを指定または推薦するのです。ただし初学者は教員のこうした意図が直ちに理解できず、また教員によって望ましいと考えるバランスが異なるので、学習成果がすぐには実感できないときもあるでしょう。重要なのは、(i) 幅広く様々なテキストを見渡し、自分の読みやすいと感じるものを選ぶこと、(ii) テキストにおける個々の章や節の目的、著者の意図を理解するよう心がけること、そして (iii) 難解な箇所当たったら、他のテキストや文献ではどう説明されているか調べてみることで、(iii) については、教員だけでなく友人や先輩の助言が有益なこともあります。文献学習を通じて学ぶ楽しみを増やしてもらいたいと思います。



AKIHIKO YANASE

経済学部准教授

(2008年3月まで。2008年4月から東北大学大学院国際文化研究科准教授)

1971年生まれ。神奈川県横浜市出身。慶應義塾大学大学院修了、同大学博士（経済学）。

専門は、国際経済学、公共経済学、環境経済学。

経済学の一般的な研究手法は、現実の複雑な経済を単純化・抽象化した「モデル」によって分析する、というものです。したがって、抽象的な思考に慣れていない学生の皆さんにとって難しいと感じるのも、無理はありません。

重要なのは、「自分の頭で考える」こと。どのテキストを選んだとしても、そこに書いてある内容をただ目で追っていただけでは、理解するのはまず不可能です。「なぜそうなるのか」と、常に考えながら読むことが大切です。また、テキストで図や数式が出てきた場合は、図を描く、自分で計算してみるなど、自分で実際に手を動かしましょう。その際、文章で書かれた内容と図や数式とを対応させて理解するように心がけてください。

それから、1冊のテキストで経済学を完璧に理解できるとは思わないでください。すべての内容を網羅しているテキストはそもそも存在しませんし、説明の仕方も常に読者にとって分かりやすいとは限りません。あるテキストで分からない箇所がでてきたときには別のテキストに当たってみるなど、「能動的」に行動することが、理解するための秘訣です。



TADASHI HAYASHI

経済学部准教授（2008年3月まで。4月から滋賀県立大学環境科学部講師）

1973年生まれ。三重県出身。京都大学博士（経済学）。専門分野は環境経済学、環境政策論。

貿易や直接投資による環境問題への影響について研究している。

<http://www1.tcue.ac.jp/home1/hayashi/>

経済学を理解するためには、教科書を読み流すのではなく、納得するまで考えながら精読し、理解を深める必要がある。現実の経済現象を読み解くために必要な理解レベルに到達するためには、図解、数式による説明、言葉による説明が併せてできるようにならないといけない。そのために是非とも、教科書と並行して問題演習の作業を行ってほしい。努力をおさず自分の手を動かして計算し、自分なりに納得のいく説明をした独自のノートを作成することを強く勧める。複数の先生から同じ内容に関して違う説明を受けたり、複数の教科書を併用して理解を深めるのも有用である。私が学部生の時には、日本評論社「経済セミナー」で特集が組まれた演習問題を活用していたが、その頃と比べればわかりやすい教科書や問題集がたくさん出版されている。勉強を進めながら自分にあったものを見つけ、意欲的な学生の皆さんには経済学検定試験（ERE）などにも挑戦して頂きたい。